

南三陸町老人クラブを激励訪問

被災地復興こそ最重要課題

9月27日、松島を経て、山川会長ほか13人が、南三陸町老人クラブ連合会との交流会に臨んだ。

28日は小雨の中、バス2台に分乗し、「震災語り部ガイド」の案内で、志津川地区を約1時間かけて回った。1日も早く、復興の町としてよみがえり、災害に強く、安心して漁業や観光に専念できる町になることを願いつつ帰途に就いた。

交流会後の記念撮影：前列向って左から2人目阿部南三陸町老連会長、その左および後ろ3名が代表参加者、前列左から3人目山川庫水戸市高連会長



津波が何もかも持ち去った！

老人クラブの再建進む

日 時 9月27日（木）

14時30分～16時30分

場所 ボランティアセンター

出席者

南三陸町老連（5人）

阿部喜十郎会長、熊谷副会長、

阿部地区会長、星みよ子女性

代表、高橋史佳事務局員

水戸市高連（14人）

山川会長、羽田・佐々木・板

越副会長、小高理事、女性委

（杉山・田邊）、研修委、板越・

清水テ、広報委（清水・柴田・

大里）、高齢福祉課（宮本・

菊池）

交流会（司会、宮本）

両会長あいさつ

犠牲者に黙祷をささげる

記念品の贈呈（寄せ書きの額、

黄門様の焼物、板越氏制作、

デコパージュ石けん、水戸黄

贈呈した記念品
の寄せ書き等



記念品を贈呈する山川会長ほかの皆さん

被災地をもっと知り 復興を後押ししよう

3～4ヶ月後、水道はもっと後だった。昔の簡易水道、プロパンの炊飯器が役立つ。道は自衛隊が来るまでがれきの山だった。楽天の副社長が高台にある106町歩のゴルフ場を寄付してくれた。仮設住宅はほぼ完成、4地区の皆さんが入居する予定。防災対策庁舎で多くの犠牲者がた。津波の高さが6m程度と見て、避難指示を出さず、職場保全と被災者対応に当たろうとしたのが原因だという。

「地獄に行ったことないけど、地獄よりひどい」（3・11複合被災「岩波新書」）に掲載された女性被災者（77歳）の言葉である。

津波による被害状況等

当日は4階建ての結婚式場「高野会館」で芸能発表大会を行っていた。約350人の参加者がいた。その場に残った人は、助かったが地震後帰宅した会員は全員津波で亡くなった。

老人クラブは約50あったが全滅。会員も186人が亡くなった。今は仮設住宅の仲間を中心に約20クラブが復活。しかし、交通の便も悪く集まる場所もない、できることは限られている。

震災後、電気が復旧したのが

この世の地獄を見たであろう南三陸町の皆さんではあるが、穏やかに、悲しみなどみじんも感じせずに私たちを迎えた。多くの物と家族や仲間を失ったがこうして生きている、と克明に被害状況を語ってくれた。町民約850人もが犠牲になり、残された命、生かされた命との想いが強いのであろう、経験したことを伝えるが使命のようにも感じられた。健気な振る舞いに胸が熱くなる。

会も終わり近況などを伺うと

実は夫を、主人を亡くしたという方が5人のうち2人もいた。ひとりの方は消防団員であったという。思わず絶句する。こちらの方が何かいたたまれない気持ちになった。

「私たちは、がんばるしかないが、南三陸町だけではどうにもならない」皆さんの支援や見守りが必要と訴える。見わたす限り土台と窓枠の無いコンクリートの建物の被災地に私たちはもつともつと思いをはせるべきだと痛感した。

真つ暗闇の「高野会館」で立ったまま一夜を明かす

志津川湾から約300mの平地に立つ結婚式場「高野会館」。地震発生時、3階の宴会場は老人クラブによる「高齢者芸能発

表会」の閉会式のさなか。強烈な横揺れに大勢の客はパニック状態になったが従業員らの適切な判断で上階に避難。会館にとどまった老人クラブ員や従業員ら約330人は全員助かった。

しかし、最高齢90歳後半、平均80歳前後の高齢者の上階への避難は困難を極めたようだ。階段は人でびっしり。このままでは津波にのまれる。体力のある人がお年寄りを背負った。4階にある約25mと約30mの会議室2つは人であふれ、立つたままの満員電車状態だったそう。

真つ暗闇の中、一番困ったのがトイレ。懐中電灯を持った人がたつた一人いて助かったという。飲み水はペットボトルが回ってきて小さい蓋一杯分を飲み

まわした。

避難指示を呼び掛けながら犠牲となった悲劇の現場

一方、悲劇の現場となったのが町の防災対策庁舎である。避難のタイミングを失った町職員約30人は防災庁舎に逃げ込み屋上に避難したが助かったのはわずか10人だった。津波は3階建ての屋上よりさらに2m上まで達したという。

何もなくなつた町にあかい鉄骨のみを残す防災対策庁舎は遠くからもすぐ目に付く。その1階入口部分には献花台が設けられた。皆さんの花が手向けられていた。全員バスを降りて祈りをささげ、震災で亡くなった方々に対し、気持ちを寄せることができた。

被災地視察・交流 研修旅行記

大里 公雄(グリーン千波)

去る、平成24年9月27日、28日、宮城県南三陸町(人口約1万5千人)の被災地視察に、会員78人2台のバスに分乗して水戸を出発。途中休憩を取りながら、松島経由で、午後2時過ぎに到着する。

車中で、山川会長が「現地を見て、命の守り方、支援の仕方等自分だったらどうするかを考え、思いやりの心を育てて欲しい」旨挨拶。

一行が「みやぎ明治村」を見学している間に、役員の一部が南三陸町老人クラブ連合会を訪問、記念品を届け「クラブ会員との激励交流会」に臨む。

この日は、海辺のすばらしい「ホテル観洋」震災時は避難場所に提供)に泊まる。夜の宴会では、津波で亡くなった方々に黙祷をささげ、懇親会となった。三味線尺八による「磯節」、「フラダンス」などみごとな芸能が披露され、アンコールがかかるなど楽しい親睦の時間を過ごす。翌日は雨の中、震災語り部カイドの案内で、南三陸町被災現場に入る。いずれも見ると聞くとは大違い! 町は土台だけ残し上物は全てがけき化し、ビルは3階まで壁もサッシも無く筒抜け、多くの人命と共に町が消えた様子を視察する。

注目の避難を呼びかけた防

防災対策庁舎は鉄骨がむき出し、言葉では表現できない様相に各自自然に手を合わせる。15~16mの津波の前には、避難を必死に呼び掛けるも、約850人の死者・行方不明者を出す。自然の驚異を改めて覚える。

「自分の命は自分で守る」、日頃からの津波対策、徹底した防災訓練が死者の数を減らす手段ではないかとの言葉が記憶に残り、学ぶことの多い研修旅行でした。

赤い鉄骨がむき出しの防災対策庁舎

